

氏 名	シニ 朱	イツ 軼	シニ 姝	
学 位 の 種 類	博 士	(美 術)		
学 位 記 番 号	博 美	第 255 号		
学位授与年月日	平 成 21 年	3 月 25 日		
学位論文等題目	〈作品〉永遠 〈論文〉現代中国における伝統染色の可能性～友禪染の制作を通して～			
論文等審査委員				
(主査)	東京芸術大学	教 授	(美術学部)	山 下 了 是
(論文第 1 副査)	〃	〃	(〃)	佐 藤 道 信
(作品第 1 副査)	〃	〃	(〃)	菅 野 健 一
(副査)	〃	〃	(〃)	豊 福 誠

(論文内容の要旨)

伝統染色は、伝統工芸一般に言えることであるが、歴史という試練に耐え、世代を超えて受け継がれている。そして、伝統で重要なことは、洗練された技術・美意識を基礎として、新しい伝統染色を築いて行くことなのである。しかしながら、発展が目覚ましい現代中国では、生産性を重視する工業的染色が中心になり、伝統染色の重要性を見失う傾向にある。伝統染色という先人の優れた技術・美意識を失うことは、人類の財産を失うといっても過言ではない。そこで、本論文では、日本の友禪染の勉強・研究を通して習得した知識・感覚に基づき、現代中国における伝統染色の可能性について考察することとした。論文と共に発表した作品では、伝統染色の素晴らしさに現代感を盛り込むことで、現代人にも親しみやすいように工夫した。そして、同時に、伝統染色の歴史・奥深さを伝えることで、伝統染色の魅力やその重要性についての認識を広めたい考えである。

第一章「伝統染織の意義」では、「用」としての伝統染織、「美」としての伝統染織を切り口に、染織が持つ性質、すなわち、実用、芸術、文化を説明し、時代に合わせて発展することの重要性を考察した。

第二章「日本の伝統染色、友禪染」では、日本の代表的な伝統染色である友禪染に焦点を当て、その誕生と発展を述べた。さらに、友禪染という技法が多く使われる着物を例に、日本人の物の見方や美意識を考察した。

第三章「中国の伝統染色の現状」では、悠久の文化を有する中国の伝統染色が直面している現在の状態に焦点を当てた。改革開放により劇的に変化してきた中国では、急速に外部から多くの新しいものが入り、伝統的工芸への意識の低下を招いた。しかし、最近では、自国の文化の重要性を感じるようになり、伝統への意識も戻りつつあるが、染色に関しては低いと言わざるを得ない。現代中国の伝統染織の現状を報告すると共に、どのような取り組みがあるのかについて述べた。

第四章「染色品制作の三要素」では、染色作品の制作に欠かすことの出来ない重要な三要素、技法、素材、イメージについて考察した。これら三要素がうまく関係したときに、良い作品が生まれる。作品を制作する過程で気づいた点を中心に、それぞれの重要な点を説明した。

第五章 「提出作品“永遠”」では、友禪染技術を用いて制作した提出作品の発想と制作過程で注意、工夫した点について論じた。私が取り組んでいる大きな課題は、現代中国にも通じる感覚を私なりに解釈し、それを表現することである。提出作品は、百合やあじさいなど、さまざまな植物がたくましく成長している様子に感動し制作したものである。友禪染という伝統的な染色方法で、生命の躍動感がある、力強い作品に挑戦した。

終章「伝統染色の可能性」では、前章までの考察をもとに、伝統染色の魅力が中国でも認識され、染色が発展していくために重要なこと考察した。具体的には、手作業の重要性、交流の重要性、アートとしての伝統染織の重要性を説明し、伝統の良い部分と現代の感覚を融合することの必要性を論じた。

(博士論文審査結果の要旨)

本論文は、中国から留学して友禅染を学んだ筆者が、中国独自のブランドの創出を視野に、アートとしての新たな伝統染織をめざす試みを論考したものである。

背景には、染織をめぐる中国と日本での歴史の違いが関係しているらしい。中国では、宮廷美術の染織の中心となったのは、手間と費用のかかる織や刺繍であり、染めの染色はむしろ民間の生活工芸としてあったという。それが20世紀後半の文化大革命、続く経済成長による工業染色の発展で、それらの染織技術は衰退した。しかし、いま、国際競争力をつけるために中国独自のブランドが模索されるようになったものの、なおその比重は織と刺繍にあり、染色への関心は低いという。一方日本では、織と刺繍がやはり長く中心となってきたのは同じだが、17世紀に贅沢への規制から友禅染が生まれて以降、染色が盛んになり、文様や技法の両面で様々な工夫が重ねられてきた。それがいまや染色のブランドとしてあること、また着物を衣桁にかけて絵画のように鑑賞する習慣から、用ではないアートとしての表現、鑑賞対象としての染色の可能性を、筆者は友禅染に見出している。

友禅染の中でも、筆者が用いているのは、自由な絵画的表現が可能な糸目友禅染であり、提出作品の「永遠」も、4枚のパネルを連続させたダイナミックな絵画的表現形式をとっている。現代的イメージのため、身近な生活から人や植物、風景を多くモチーフとし、提出作品では百合やあじさいをデジタル加工したような表現をとっている。筆者は、今後の中国の染色では、手作業、地域・民族間の染色の交流、アートとしての伝統染色への認識が重要になるとし、未来のビジョンとプランにもすでに着手しつつあるように見える。「伝統」の発展とは、「伝承」ではなく、伝統に基づく新たなものへの挑戦だと考える筆者の意識と姿勢が、十二分に発揮された学位にふさわしい論文として評価された。

(作品審査結果の要旨)

中国でテキスタイルデザインを学び、留学生となり糊防染という日本独自の染色に出会った。本人には、未知の領域での研究であったが、実に新鮮であったようだ。

日本の染色技術は他の文物同様に、中国大陸や朝鮮半島を経由して流入した。その形状、技法は長い時間を経て、今日のものへと変容し独自の文化的価値を高めた。

インドの泥防染や中国の一珍糊による防染法に対して、糯米の糊による防染法は、日本の風土に合わせ変化したといえよう。忘れてはならないのは、日本の染色を大きく発展させた要素の一つは、染色の対象が“着物”であったことである。

本学生は、修士課程以来、友禅技法による染色表現を続けており、自己の内面性に向き合った心象風景を追い求めている。修了作品は、中国の街角とそこに佇む人物を配置した構図で、人間の存在と時間の相関性を追求した。その後は、花をモチーフにした表現が多く見られるが、そこには一種の無常観が感じられる。

提出作品「永遠」は、1点の大きさが縦130cm×横168cmの計4点からなる大作である。それぞれが完結した内容を持っているが、4点の配列により空間の増幅が計れ、本人の宇宙観の表出となった。

糸目糊という危うい境界線によって、区切られた構成要素が画面の中で生き活きと演じ合い、同時に糸目糊による白い線が共鳴し合っている。色彩に過不足がなく、地色の黒色も無機質にならずに幅のある十分な深みを感じさせる。直接描写による表現とは異なった絹地と染料による質量を、最大限に活か

すことの出来た作品といえる。

(総合審査結果の要旨)

日本の染色は“きもの”を媒体として発展を遂げてきた。“きもの”という独特の衣装に、日本人の美意識が込められて数々の染色技法が生まれた。中でも友禅染は技術的な難易度は高いが、色彩・図柄において比較的自由的な表現が可能であるため、きもの特有の平面性と相まって、極めて絵画的な図柄のものも多く制作された。

日本の染色が単なる装飾や模様に終わらなかったことの大きな要因である。

中国からの留学生朱軼舛の、友禅への取り組みが始まったのは7年前のことである。

論文の記述にもあるように、最初のころは、絵を描くのと同じように考えたようであるが、「どうもそうではないようだ。」と気づいたとき、最も単純で最も難しい染色の基本に触れた。

修士修了作品は、パネル仕立の大作であったが、中国という大陸の乾いた土の匂いを友禅特有の糸目の線で切り取ったような感があり、大らかさと繊細さを併せ持った秀作。ベージュ系の色彩の中に覗く明るい空色が印象的な作品である。

今回制作した学位申請作品は、百合やあじさいなどの植物をモチーフとした4枚一組の、やはり絵画的なパネル作品。黒の地色に植物はピンク系の赤、独自に工夫した数種類の太さの違う糸目の線の白が美しい。長い時間を費やしてまとめ上げた構成には安定感と説得力があり色彩をより美しく感じさせる。そして、特筆すべきは地色に対する作者の意識で、全ての染色の基本とすべきところをしっかりと掴んでいる。これは理屈ではなく数多くの制作のなかで或る日突然掴むことができる感覚である。

論文では、題目の通りに日本の染色と母国中国の染色の置かれた状況を対比させながら、これからの中国の染色はどうあるべきか自身の考えをのべている。おそらく作者は将来中国における染色の指導者の一人となるであろうが、険しい道も乗り越えて行ける勇気と明晰な頭脳を持った女性である。

審査員一同、これからの作者の健闘を祈りつつ審査を終えたが、その評価は極めて高いものであった。